

「オーストラリアを学ぶ1・2」における文化交流教育

国際教養学部 アジア学科、オーストラリア研究所長 南出 眞助

追大プロジェクト科目「オーストラリアを学ぶ1・2」は、土曜日の1時間目に設定されている。昨年度までは春学期のみであったが、今年度から春・秋両学期開講とし、それに応じて科目名末尾にも1・2を付した。

この科目はリレー講義であり、本学のオーストラリア研究所員である専任教員を中心に、担当者1名あたり1～2回の授業を分担している。リレー講義でも、近接した分野が連続する方が学生も理解しやすいので、概ね春学期は自然環境・地理・歴史・教育などの各テーマが、秋学期は政治・社会・経済・国際関係などの各テーマが連続するように配置している。

この科目のもう一つの特徴は、授業を公開している点にあり、予約なしで一般市民の聴講を受け入れている。本学学生の履修登録者が例年80～100名程度であるのに対し、一般参加者は各回10～20名程度である。また1・2ともに「大学コンソーシアム大阪」の認定科目として、他大学の学生の履修も認めており、数名ではあるが登録者が聴講に来ている。オーストラリアという対象それ自体が高校ではほとんど学ばない内容であり、授業アンケートでも「内容が新鮮で興味深い」という質問項目で高得点を示している。同じことは一般市民にも、他大学の学生にも共通する認識であろう。

したがって、受講生のオーストラリアに関する知識レベルはさまざまであり、また授業全体を単一の学問分野のディシプリンで押し通すこともできない。このようなリレー講義においては、すべてを日本語による学問・知識体系にコード変換して研究者の立場から一方的に解説するのではなく、ときとして素材を生そのまま提示し、そこから得られる体験の意味づけは各自にまかせるといふ、知的リセットが必要である。「なぜ？」という説明付けはさておき、率直に「感動した」「おもしろかった」という体験を尊重した方が、異文化理解への早道につながる場合もある。

そこで今年度も、大学関係者にこだわらずに話題提供者を学外から招聘し、受講生が実体験する、あるいは話題提供者の体験談を受講生が共有するという場を設定した。学外招聘講師による授業とその概要はつぎのとおり。

【春学期】

- オーストラリア先住民の生活と文化（三上賢治＝ディジュリドゥ奏者）：アボリジニ集落での生活体験ビデオの紹介とディジュリドゥ演奏
- オーストラリア国民のアイデンティティー（津田博司＝本学非常勤講師、「西洋史概説1・2」担当）：イギリス連邦史全体に位置つけた講義

- オーストラリア留学からプロ通訳へ（花房恵＝シドニー在住国家資格通訳者）：本学卒業生の英語学習・留学体験談紹介
- オーストラリアの教育政策（ミシェル・アラン＝オーストラリア大使館参事官（教育））：大使館関係者による留学事情紹介
- アボリジナル・アート体験教室（三上賢治）：民族楽器と絵画製作ワークショップ

【秋学期】

- オーストラリアー日本；政治と協働（リチャード・アンドリュース＝オーストラリア大使館政務担当公使）：大使館関係者による歴史的な分析
- オーストラリアのジェンダーと労働（川口章＝同志社大学教授）：現地での長期間の生活に根ざした社会分析
- オーストラリアの花と国際交流（渡部玲子＝ナチュラルフラワー・セラピスト）：市民レベルの交流現場報告
- オーストラリアと日本の文化芸術交流（ナンシー・ゴードン＝オーストラリア大使館広報文化参事官）：大使館関係者による交流体験談と現場報告

上記の各授業のうち、オーストラリア大使館関係者による授業は大使館の公務として位置づけられていただき、謝金・交通費等の支弁は発生していない。

授業では毎回、学生には小テストと感想を課し、一般市民には自由な感想を書いてもらっている。その内容を集計すれば、総じて体験型・体験報告共有型の授業は新鮮な感動を与えているといえる。たとえば春学期におけるディジュリドゥ演奏やその楽器製作などでは、学生の中に、新たな発見に対する率直な驚きの様子がみられた。言葉や知識では理解できない体験が、既成の固定観念を根底からくつがえすのである。また卒業生の体験談紹介では、学生にとって先輩という親しみやすさもあって、英語学習や海外留学への意欲につながったような感想が多くみられた。異文化理解や国際交流がそれほど大げさなものではなく、意外に身近に実感できるという印象を与えただけでも、大きな教育効果をもたらしたといえよう。